



明治6年(1873年)ウィーン万博の伝習生

有田と万博

有田焼が初めて万国博覧会に出品されたのは、慶応3年(1867)パリでのことです。このパリ万博を皮切りに、明治6年(1873)ウィーン、明治9年(1876)フィラデルフィアなど次々に万博への出品が行われ金賞牌の受賞など高い評価を受けています。

幕末・明治期は、衰退した有田焼の貿易が再開され、再び海外輸出が盛んに行われた時代です。万博への積極的参加と成功が海外での有田焼の評価に影響を与えたことはいうまでもありません。

また、万博への参加は何も有田焼の名を高めるためだけのものではありませんでした。万博に参加した有田の指導者たちは、製陶の先進地となっていたヨーロッパをつぶさに見て回り、新しい技術の習得や製陶機械の輸入に努めています。そして、これが明治に始まる有田焼の近代化に大きく貢献することになりました。万博は有田の発展にとって大きな起爆剤であったといえます。

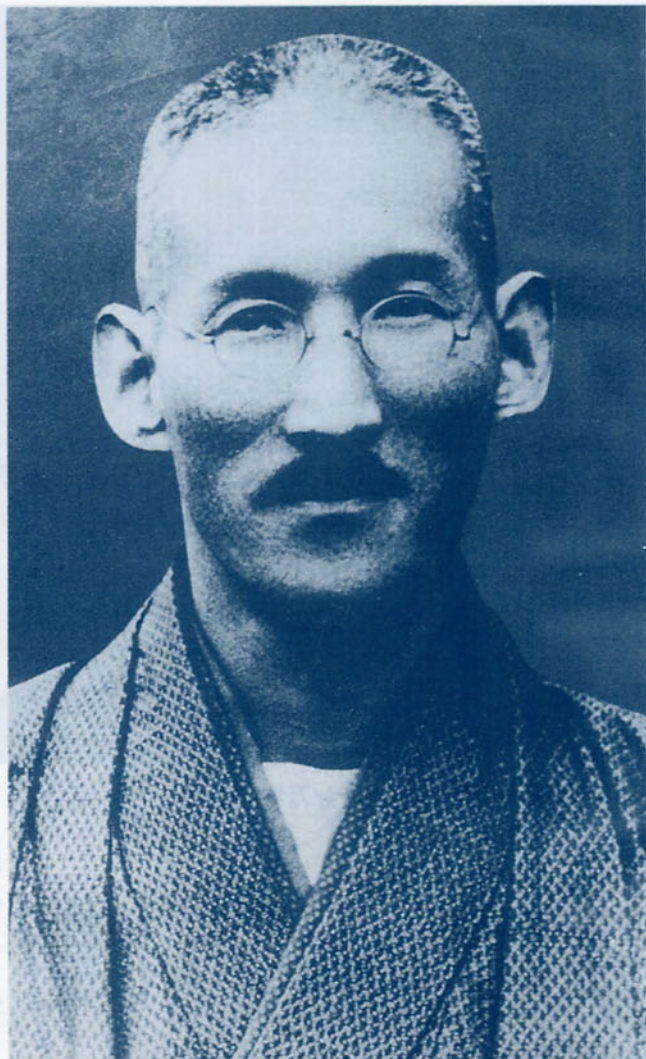
そして来年、今度は有田で世界的な焼物の博覧会、世界・焔の博覧会が開催されます。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No. 29

ふかがわ ろくすけ
深川 六助



深川六助

ゴールデンウィーク、有田は陶器市です。今回はこの陶器市にまつわる人物の一人、深川六助をご紹介します。

深川六助は、明治3年(1870)に生まれ、16歳のとき有田の白川小学校校長・江越礼太の推薦で初代文部大臣・森有礼の書生となりました。いわゆる俊才だったようです。森有礼が暗殺された後は、横浜に移り叔父が経営する田代屋で貿易の仕事に携わっています。

六助が有田に戻ったのは、明治41年(1908)のことでした。キリスト教徒であった彼は、さっそく自宅を使い日曜学校を開いたり、大正8年(1919)には私立有田幼稚園を設立したりと有田の教育に尽くしています。

半面、大正2年(1913)には泉山磁石場の石場組合事務長に就任し、それまで無計画に行われていた採掘の改革にあたりました。また、町議会議員、山林組合議員、郡議会議員、県議会議員を歴任するなど



昔の陶器市、昭和30年代とおもわれる

政治的にも有田を支え続けています。

そして、彼がかかわったものの中で、最も強く現代と結び付いているのが陶器市です。現在、陶器市は、有田にとって町を挙げての一大イベントに成長していますが、その始まりは、大正4年(1915)の第19回陶磁器品評会にあわせて行われた、窯元や商店の大売り出し蔵ざらえにみられます。

この蔵ざらえを提唱した人物こそ、深川六助です。六助と同世代の中島浩気は、その著書『肥前陶磁史考』の中で、陶器市についての六助の考えを次のように記述しています。

「…これが茶市の如く^{ごと}いっせいに^そ挙行されて例年の行事と成るに及ばば、其の間また準備工夫あるべく、もし方法よろしきを得ば、或るいは意外の発展を見るやも計られずと主張して止まず。…」

大正12年(1923)にこの世を去った六助が、今日の陶器市の人波を見たら、きっと会心の笑みをもらすことでしょう。(松尾隆一)

金ヶ江三兵衛家 について

初代金ヶ江三兵衛（いわゆる李參平）は明暦元年（1655）に没していることが『竜泉寺過去帳』や白川にある墓碑によって明らかにされています。後世の文献には三兵衛が上白川の天狗谷に窯を築いたと記されており、過去帳に記載されている内容「上白川三兵衛」とも矛盾しません。今回は初代三兵衛没後の三兵衛家の流れをさぐってみたいと思います。

初代金ヶ江三兵衛の没後の過去帳の記載は万治3年（1661）の「上白川三兵衛娘」とあるのを最後に寛文3年（1663）からは「稗古場三兵衛女房」とあり、以後は稗古場山に三兵衛家の記載がみられます。よって、1660～1663年の間に上白川から稗古場に移った可能性を考えることができます。一方、考古学的にみても、白川地区には天狗谷窯（上白川）、中白川窯、下白川窯の3ヶ所の窯場が確認されています。そして、出土製品の内容や窯の焼成室の規模から各窯の操業期間を推定すれば、天狗谷窯や中白川窯は、1660年代ごろ、遅くとも1670年代には廃窯を迎え、以後は下白川窯のみが江戸時代を通して操業されているようです。ここで三兵衛家が稗古場へ移った年代をもう一度考えてみますと、天狗谷窯の廃業に際して、稗古場へ移った可能性が高いように思います。その場合、過去帳の上では「上白川」は寛文8年（1668）までは存続しているため、窯が順次に築かれた天狗谷窯の窯場の中のいずれかの段階の窯が廃窯した際に移った可能性も高いのですが、考古資料からみる限り、1660～1663年ごろに天狗谷窯の窯場そのものが廃業したと考えても今のところ無理はないように思います。

そして、その1660～1663年ごろという時期は三兵衛家だけでなく、有田にとっても大きな転換期であったと思われます。窯場に点在していた赤絵屋を集め赤絵町が形成されるのもその頃ですし、酒井田柿

右衛門家が年木山（泉山）から南川原へ移るのもその頃と思われます。また、伝承によればその南川原には御道具山が寛文年間（1661～1672）に移ったとされています。こうした動きはおそらく別個のものではなく、一連の流れによるものと考えた方が自然でしょう。初代三兵衛や百婆仙（1656年没）ら有田焼創始以来の指導者の世代が没したことやオランダ東インド会社による1659年の大量注文に始まる大量輸出時代の到来が何らかの関わりをもつものと思います。

さて、稗古場に移った三兵衛家はしばらくは窯焼きを営みましたが『金ヶ江家文書』によれば五代目の惣太夫までには窯焼き業は倒産して窯焼き職をやめ、そのあとの三兵衛からは絵書き職で生活していると記されています。五代目惣太夫が実際には何代目にあたるのか、正確にはわかりませんが、稗古場に移って数代のうちに窯焼きを廃業しているようです。

また、金ヶ江三兵衛家についてはこの他に南川原に石碑（墓碑）が残っています。碑文から明和6年12月に没した金ヶ江三兵衛（『金ヶ江家文書』によれば五代）の墓碑と思われるが、過去帳には「稗古場山金ヶ江三兵衛」とあります。南川原に墓が残るのは、三兵衛が窯焼きを廃業して絵書き業をしていたことと関係があるのかもしれませんが。

（野上建紀）

▼竜泉寺過去帳にみられる金ヶ江三兵衛家関係の主な記載

[]内は『金ヶ江家文書』の家系図や『肥前陶磁史考』による

明暦元年(1655)上白川三兵衛	[初代]
万治3年(1660)上白川三兵衛娘	
寛文3年(1663)稗古場三兵衛女房	
天和3年(1683)稗古場山三兵衛□	
元禄17年(1704)稗古場山三兵衛親	[二代]
正徳3年(1713)稗古場山三兵衛娘	
享保9年(1724)稗古場山金ヶ江三兵衛	[三代]
享保15年(1730)稗古場三兵衛子	
元文元年(1736)稗古場三兵衛室	
寛延4年(1751)稗古場三兵衛母親	
明和元年(1764)皿山金ヶ江三兵衛子惣太夫	[四代]
明和6年(1769)稗古場山金ヶ江三兵衛	[五代]
安永9年(1780)稗古場山金ヶ江三兵衛	
天明7年(1787)稗古場山金ヶ江三兵衛母	
文化3年(1806)稗古場山金ヶ江三兵衛	[六代]
嘉永元年(1848)赤絵町金ヶ江三兵衛	

焼物づくり 今昔

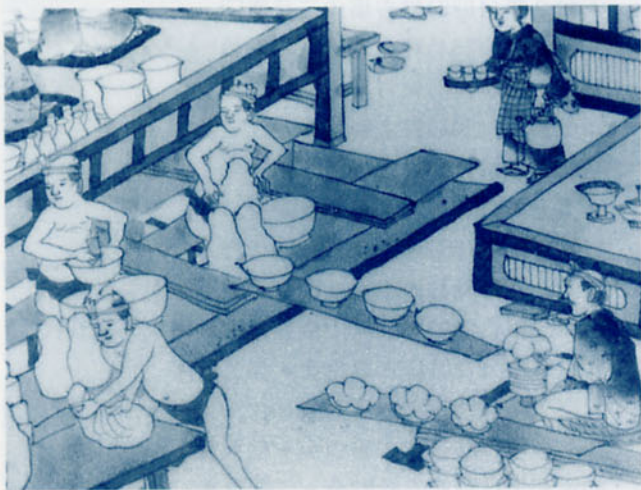
染付有田皿山職人尽し絵図大皿

4 成形

陶土づくりの工程である「水簸（すいひ）」が終わると、次はいよいよ焼物の成形に入ります。成形は有田では「細工（シャーク）」とよばれ、「ロクロ細工」と「型細工」の二つの種類に分けられます。

まず「ロクロ細工」は、ロクロを使う成形方法で、絵図では左側に描かれています。右がこれから細工に取りかかろうとする人で、左の人はヘラを使って形を整えています。ここで使われているロクロが「蹴ロクロ」で、足で蹴って回します。ロクロは有田では「車（くるま）」と呼ばれ、焼物づくりの一種の象徴的な道具であり、今でも正月の仕事始めを「車おろし」といいます。しかし、こうしたロクロも今ではすっかり姿を消し、ほとんどが電気ロクロに代わっています。

次に「型細工」は、型を使う成形方法で、絵図では右下に描かれています。型細工には「型打ち」「押し型」「鑄込み」などの種類があり、絵図の人物は型打ちをしています。型打ちは一旦ロクロで成形し、型に被せて形を整える方法で、型に直接粘土を被せるのが押し型成型です。一方「鑄込み」は、明治に導入され昭和に普及した方法で、液状の粘土を鑄型に流し込んで作ります。今では型打ちや押し型成型はほとんど見られなくなり、鑄込みが主流になっています。



染付有田皿山職人尽し絵図大皿の成形

お知らせ

寄贈資料紹介

- ◆ 陶磁器資料 2点 大樽 中島 政利氏
- ◆ 民俗資料 9点 戸杓 坂口 俊哉氏
坂口チエ子氏

ありがとうございました。

民俗調査のお礼

平成2年から5年間に渡る聞き取り調査が終了しました。たくさんのお話を聞かせていただきありがとうございました。皆さんのお話をもとに今年度は報告書を刊行する予定です。

おわび

皿山びとの歌No.28で取り上げました石炭窯の写真につきまして、撮影者牛島弘氏の名が記載されておりませんでした。おわびいたします。

◎現在、資料館では昔の陶器市の写真を探しています。お心当たりの方はご一報ください。

石場のこだま

桜があっというまに散り、陶器市の時季となりました。陶器市が始まると町の通りは活気づきますが、資料館の辺りは比較的静かです。陶器市の見物の後は息抜きに資料館を訪れてはいかがでしょうか。（り）

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.29

発行年月日 * 平成7年5月1日
編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1
☎0955-43-2678 F A X 0955-43-4185